
約束

XBOX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束

【コード】

N9100G

【作者名】

XBOX

【あらすじ】

僕は彼女に守られている。そう自覚した。

約束

僕がまだ小さい時、交通事故にあった。

そのとき、僕には女の子の友達がいてとても悲しんでくれました。
その時彼女は、

「これから君は私が何があっても守るから安心していいよ」

僕はこの時、僕はその言葉が嬉しかった。

本当の意味はわからなかったけど

登校

退院後

彼女は小学校に入っすぐ一身上の都合により
転校しつて行った。

その時彼女と約束した。

「高校生になったら会いに行くからそれまで待っててね。」

彼女は泣きながら僕に言った。

あれから、月日がたった。

僕は男とも女とも見分けがつかない顔になってしまった。
そして神名しんめい高校に入学することになった。

今日が入学式当日だ。

プンプンッ プンプンッ

目覚ましがつるさいがこれをスルーして
睡眠を続けていると階段を上る音がした。

コンコン

誰かが僕の部屋の扉をノックする。

「姫路、起きなさい今日入学式の日でしょ。恵子はもう
起きているわよ。」

僕の名前は雄大 姫路 普通姫路が苗字だるとか突っ込む
なそこ

あと恵子というのは僕の妹で2つ下だ

「分かった。今起きるよ。」

僕は神名高校の制服に着替えると台所に向かった

台所のドアを開けるとそこにふんぞり返っていたこの人が
僕の母さんです

ここは普通父親じゃないのとかゆうな

この人は20前半にしか見えない美貌の持ち主だが
実際は4「失礼なこと考えてない姫路」すいません

母さんは置いておこう父さんはあの時の交通事故が
もとでなくなっている

キッチンを見るとわが妹、恵子が料理をしていた

母さんは自分の料理より美味しいので恵子に作らせている
怠けているだけな「うるさい」母さん僕は一言も喋っていないですよ

「兄さん、そこに座って、ほら母さんもすぐ料理ができるから。」

恵子が母さんにも促した。

料理を食べ終えて、時計を見る

すでに7:55をまわっている

神名高校は家から歩いて45分位の場所にある

入学式が8:30なので既に遅刻だ

恵子の学校は家のすぐ近くだし

母さんの職場へは歩いて30分ぐらいだから1番遠いのだ

だが歩いて45分だと言ったが、僕には自転車という

強い味方がいる

遅れることはない

行きに何もなければ

僕は自転車に乗って神名高校に向かった

ここでハプニング発生

僕の高校の男物の制服を着た人が交差点で飛び出してきて

接触事故を起こしてしまった

「大丈夫ですか！！怪我はありませんか？！」

「いや大丈夫だ。少し、擦り剥いたただけだ。気にするな。」

そういうとその人は、学校に向かって歩き出した

僕はその人の横を歩くことにした

すると彼が突然こう言った

「私はこの学校で人に会いに来たんだ。君は待ち人か
はいるのかい？」

僕はこう答えた

「いますよ。僕は今でも待っています。」

普通の人が聞いたら、誰をと聞くとところだがその人は

「そうか。」

と一言いうだけ

そうこうしている間に学校の門についてしまった

「私も1年だから同じクラスになれるといいな。じゃあまたあ
とで。」

その人は言って別れた

登校（後書き）

初めての小説です。
おてややらかに

書く速さがまちまちになるかも知れませんが

会いたかった人

あの人と校門で別れてから、僕はクラス分けの掲示板

(この学校では、かなり機械化が進んでおり、教室の黒板さえパソコンに

繋いでデータを送って、表示させるため

勿論これもパネル式だ。)
に向かった。

掲示板を見ると僕のクラスは5組になっていた。

(この学校は毎年150人位集まるので1クラス30人前後では当たり前だと思う)

「友達できるかなあ」

彼はこの時見逃していた。

そう約束の相手と同じクラスに書かれていることを

彼がクラスに着くと既に25人位の人が集まっていた。

その中にさっきの人を見つけた。

「そういえば、さっき名前聞かなかったよね」

僕は近づいてそう聞いた。

「そうだったか？まあいい。私の名前は鳳凰寺 燐だ。
これから宜しく。」

「僕は、雄大 姫路、此方こそ宜しくね。」

彼は気がつかなかった。

燐が少し（観察力のあるものしか気がつかない程度のものだが）
動揺していたことに

程なくして、体育館に全校生徒が集められた。
後ろを見ると1年の保護者の席もある。

これだけ言えばどの位の大きさが分かるだろう。

校長が話をしようとしている。

（それにしても校長先生が若すぎる気がする。

10代にしか見えない男の人、しかもかなり美形）

この時は知らなかったが20代前半がこの人の歳だ

「えーとそうだね君達は我が神名高校へようこそ。

僕はそれほど長い時間、話す気はないので聞いてほしい」

そついうと彼は

「この学校で青春をおおかしたまえ、僕はそのためにこの学校を
作った

それだけは知っていてほしい。 以上だ。」

皆目が点になってしまふほどの妄言を吐いた。

そしてアナウンスが

(以上校長先生からのお話でした。……ふざけんな話が違っただろうが!!)

あのバカ連れ戻せ!! おい電源が入ってるぞ?!)(ブツツ

皆「へっ??」とか言ってる

(続きまして生徒会長の言葉)

「初めまして、俺が生徒会長の今和泉 蓮です。

少年少女よ大志と野望を抱け、そして青春をおおかせよ。

それが我らが学校の今年のスローガンだ。(会長、ちよつと此方に)

なんだやめろ来るなそんな危険なものしまギャー……」

(以上、生徒会長からのお話でした。……あのバカ兄弟なにをやらかしちゃっ

てくれるの? いっそ副会長に殺されて死ね!! おいまた電源ついてるぞ?!)(ブツツ

新発見、生徒会長と校長先生は兄弟のようだ。

あと生徒会長をリンチしているのは副会長のようだ。

(それでは全部すつとばして、3年から解散……)校長、いや馬鹿秀樹、何をやってる。

奏さんそんなに怒らないですよ。話を聞いただけじゃつまらないだろ。そんなものかたずけて

危ないからちよつ振り下ろさなグハツ 「早く解散してください。

」

以上、副校長からの言葉でした。尚校長に不審な動きありのときは、校長の奥さまの奏さんまでご連絡ください。）

校長先生は秀樹、副校長は奏、しかも二人は夫婦らしい。

解散後、教室に戻った後、集配物や先生の紹介などがあつた。その間に、僕は3人友達を作つた。

下校前に、僕に燐が「同じ方向だから一緒に帰らないか？」とさそてきたので一緒に帰ることにした。

下校途中

（燐って、よく見ると女の子みたい。容姿は男に見えなくはないのけど、

僕はこの人が女の子だと思う。本人に聞くか。）

「ねえ、君って女の子じゃないの。」

そついうと彼女は

「ほう、さすが鋭いな、ご明察とつり私は女だ」

「どうして男の子の格好しているの？」

そつ聞くと何拍かおいて

「約束を果たしにきた。 お前とお姫様」

そついうと燐は笑った。

燐は彼女だった。

会いたかった人（後書き）

評価して送ってください。

次話制作の活力にします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9100g/>

約束

2010年12月5日06時20分発行